

スペイン語の「和らげ表現」について

三 好 準 之 助

目 次

1. atenuación とは
 - 1.1. アカデミア (2001) の辞書
 - 1.2. Moliner
 - 1.3. Manuel Seco, *et al.*
2. 和らげ表現の機能
 - 2.1. スペイン語における atenuación と lítote
 - 2.2. 修辞学の lítote
 - 2.3. 語用論の atenuación と lítote
 - 2.3.1. Haverkate (1994)
 - 2.3.2. Vigara (1992)
 - 2.3.3. Briz (1995)
3. スペイン語の atenuante 「和らげ手段」について
 - 3.1. 「和らげ表現」の定義
 - 3.2. 「和らげ手段」の種類
 - 3.3. いくつかの「和らげ手段」
 - 3.3.1. 「形態統語論的手段」としての lítote (緩叙法)
 - 3.3.2. 概念の小ささを表現する un poco
 - 3.3.3. 小辞の como
4. スペインの一般語と南北アメリカスペイン語
 - 4.1. Montes (1980–81)
 - 4.2. Briz (1995)
 - 4.3. Puga (1997)
 - 4.4. Briz (2007)
 - 4.5. スペインの古用法と現代の南北アメリカの用法
5. 新たな仮説
 - 5.1. Miyoshi (1999) : acá–allá
 - 5.2. Miyoshi, *et al.* (2011)
 - 5.2.1. 現代語の出現頻度
 - 5.2.2. スペインの中世末と近世初頭
 - 5.3. 両文献から判明したこと
6. まとめ
 - 6.1. lítote と atenuación
 - 6.2. 和らげ表現
 - 6.3. スペイン語の和らげ表現
 - 6.4. 和らげ表現の仕組みと手段のまとめ

付記 (1) スペイン語のポライトネス研究と mitigation

付記 (2) 日本語語用論の配慮表現と和らげ表現

注

参考文献

キーワード：スペイン語，緩叙法，語用論，丁寧表現，和らげ表現

2010年の8月に北京外国語大学で開催された第7回アジアスペイン語学会議において、パレンシア大学の Antonio Briz 教授が「語用論の範疇としての和らげ表現」“La atenuación como categoría pragmática”という題名で講演された (Briz 2011)。この題名からも理解されるように、atenuación は語用論で扱われる範疇のひとつである。

ことばの研究で今日よく使われるこの術語は、スペイン語研究の分野ではどのように扱われているのであろうか。それは古典的な修辞学 (レトリック) とどのようにかかわっているのであろうか。そして、この術語の視点からスペイン語の様ざまな現象を検討するなら、今後、どのような新たな知見が獲得される可能性があるのであろうか。本稿はこのような疑問点に対する筆者なりの答えを提示するものであるが、それが今後、日本におけるスペイン語学に資するところが少しでもあれば幸いである。なお、本稿では atenuación を「和らげ表現」と、そして atenuante は「和らげ手段」と訳す。

1. atenuación とは

atenuación は、スペイン語の現代語辞書では以下のように定義されている。

1.1. アカデミア (2001) の辞書

Real Academia Española の辞書第 22 版では、atenuación の語義の 1 番目は「atenuar する行為とその結果」であり、2 番目がおおむね「修辞学にあやのひとつであり、理解してほしいことをすべては発言しないこと。といっても、話し手の意図は十分に理解される。普通、断言したいことの反対概念を否定する」となっている¹⁾。例文は No soy tan insensato. 「私はそれほど無分別ではない」、En esto no os alabo. 「このことについては、私は君たちを称賛しない」である。修辞学的な定義である。

1.2. Moliner (2007)

モリネルの場合も同様である。atenuación の 2 番目の定義では、「修辞学にあやのひとつであり、話し相手への敬意から、表現されることから何らかの方法で唐突さ (あらっぽさ) とか乱暴さ (激しさ、威嚇、強制、無理強い) を取り除くことにある。そしてその動機は、話し手が過度に断定的な (強い調子の、断固とした、切断するような) 表現に対して抱いている自然な嫌悪感 (毛嫌い、反感、憎悪) である」とする²⁾。修辞学にあやのひとつであるとするも、語用論の politeness 理論に合う定義である。敬語的な解釈も含まれている。

1.3. Manuel Seco, et al. (1999)

マヌエル・セコたちの場合も atenuación には 2 種類の語義が提示されている。2 番目は文学

上の理論や技法の用語であり、*lítóte*に相当する、とあるが、その用例には「‘第1’のかわりに『第2ではない』と言っているが、このことは修辞学で*lítóte*と呼ばれている」が紹介されている³⁾。表現したいことの反対の概念が否定されている、というアカデミアの定義に近い。

2. 和らげ表現の機能

広義の和らげ表現は、伝統的に修辞学で扱われてきたが、20世紀後半から研究が進められてきた語用論でも、*politeness*（本稿では暫定的に、この英語の術語をポライトネスとし、スペイン語の*cortesía*、日本語の「丁寧表現」との同義語として扱う）の表現手段として扱われている⁴⁾。まず、スペイン語における*atenuación*という術語の通時的な事情などを確認しておこう。

2.1. スペイン語における*atenuación*と*lítóte*

上記1.3.項にて、*atenuación*は伝統的修辞学の術語*lítóte*に相当するという解釈があることを確認した。さらに、モリネルの辞書でもアカデミアの辞書22版でも、見出し語*lítóte*は*atenuación*であるとされている⁵⁾。他方、Corominasでは“LITOTE, h. 1764, lat. *litōtes*.”（初出は1764年）とあるし、実際、1734年に出版されたReal Academiaの模範辞書（1969）には*lítóte*という語は見出し語になっていない。この術語は、修辞学の分野でもスペインでは18世紀後半に使いはじめられたことになる⁶⁾。他方、*atenuación*はアカデミアの模範辞書には登録されているが、語義は「なにかを細くしたり弱くしたり縮小したりする行為。そして同様に、疲れはてたり圧縮されたり衰弱したりした結果」であって、そこには特に言語表現への言及はない⁷⁾。

2.2. 修辞学の*lítóte*

佐藤（1978: 14）によると「古代のレトリックは、第一に《説得する表現の技術》、そして第二に《芸術的表現の技術》という、よく考えてみれば相反しかねないふたつの役を引き受けることになった。その二重の役わりはその後二千年以上継承されている」。そして「相手の好意を導き出すことをめざすレトリックは、やがて説得という目的から離れ、もっぱら魅力的な表現そのものを目的とする、別の機能をもにうることになる」（1978: 13）⁸⁾。

そして*lítóte*（スペイン語）である。佐藤（1978）は第7章を「緩叙法」に当てているが、この緩叙法とは、巻末の「レトリック用語－日本語・ヨーロッパ語・対照表」によれば、ラテン語のLITOTES、フランス語のLitote、英語のlitotesである（なお、その対照表には*atenuación*に相当する用語は含まれていない）。佐藤によると、緩叙法とは（1）反義表現を否定する表現方法（「あいつもなかなか、ばかじゃない」）であり、（2）「そのことがらを、程度の差はあるにしてもとにかく、弱めて表現する」方法であるが、（3）その目的は「緩叙表現がおおいかく

している積極的な肯定に、いっそうの力と重みを与えることにある」(p.231)。そして彼は(1)を緩叙法(リトート)と呼ぶが、(2)は誇張法のなかの「過小誇張法」(ミオーズ、スペイン語 *miosis* 「(医学用語) 瞳孔収縮, 縮瞳」)とする。しかし古典レトリックの啓蒙書には、緩叙法をミオーズとするものもある(p.232)。なお、(1)は(2)にふくまれる一形式であるとも言える(p.249)。

なお、佐藤(1978:201-2)によれば、ヨーロッパの古典レトリックでは誇張法(スペイン語: *hipérbole* 「誇張法, 誇大表現」)がしばしば下位分類された。過大誇張法(*auxesis* 「(医学用語) 成長, 増大」)と過小誇張法である。そして緩叙法であるが、「それはだいたい誇張法の逆と言ってもいいもので、ものごとをことさらにひかえめに言いあらわす表現法だが、昔から、その《緩叙法》と《過小誇張法》がしばしば混同されてきた。しかし両者は、実は本質的にことなるものを見かたをあらわしているのだから、理論的に、一緒にするわけにはいかない。緩叙法とは、ごく簡単に言うと、うれしくてたまらないときにわざわざ『かなしくはない』などとうそぶく表現のことである」(この表現方法は上記の緩叙法の2種類のうちの(1)に相当する)。

また Corbett (1971: 487)によれば、*litotes* は「だれかをだますためではなく、我々が口にすることが与える感銘を高めるために、故意に控えめに述べる用法」であるし(例文は否定文が多い)、それは過小誇張法の一形式である(p.488)⁹⁾。上記で佐藤が指摘しているように、緩叙法をミオーズの一形式であるとする解説書である。

いずれにせよ、修辞学で使われる緩叙法は「伝えたいことを、反義の内容を否定したりして弱めて表現する技法であるが、その目的は、伝えたい内容を一層強く表現することである」ということになる。

他方、語用論の研究においても、この *litote* という修辞学の伝統的術語を、後述のように修辞学の定義で使う研究者がいる。たとえば Leech であるが、彼は *rhetoric* という用語を独自の定義で使用しているものの(1983: 15)、協調の原理(CP: Cooperative Principle)に明らかに違反する2種類の表現方法に *hyperbole* (*overstatement*) と *litotes* (*understatement*) があるとする(p.145)。

2.3. 語用論の *atenuación* と *litote*

これらの術語はスペイン語の語用論でどのように扱われているのであろうか。

2.3.1. Haverkate (1994)

スペイン語の語用論で扱われる丁寧表現については Haverkate が詳しい¹⁰⁾。彼は1994年に『言語による丁寧表現。言語語用論的研究』を発表したが、その第9章は「丁寧表現の方略」(*Estrategias de cortesía*) に当てられている。彼はまず、スペイン語の *atenuación* は、英語の *hedging* 「曖昧化」に相当し、発話行為の遂行的文の実現を通して表示されるが、人称や時制によっても表示されるとする(pp.195-6)¹¹⁾。彼は丁寧表現を説明するために、まず、発話行

為を調音的 (articulatorio), 発話内行為的 (ilocutivo), 命題的 (proposicional) に下位区分するが, その命題的発話行為を参照的 (referencial) と叙述的 (predicativo) に分ける (p.196)。この叙述的行為において, 丁寧表現のために述部の概念内容を操作する方略には3種類ある。すなわち選択 (selección), 修正 (modificación), 反復 (repetición) である。本稿ではこのなかの「選択」と「修正」が問題になる。

選択の方略には婉曲表現 (eufemismo)・緩叙法 (lítote)・反語 (ironía) がある (p.203)。Haverkate にとってこの緩叙法 (lítote) とは, 上記のように, 「選択」という「和らげ機能のある丁寧表現の第2範疇 (segunda categoría de cortesía mitigadora)¹²⁾」であるが (p.203), ある意味を持つ語彙素を直接表現することを避け, それと反対の意味の語彙素を否定する表現によって実現される (p.206)¹³⁾。実際, 例文では語義の尺度のうえで中間段階のある decente 「慎みのある」や sabio 「分別のある」などの語が否定されている。本稿の2.2.項で紹介した佐藤の「(1) 反義表現を否定する表現方法」である。

丁寧表現のために述部の概念内容を操作する方略の2番目は「修正」である。そのための主要な方策のひとつが「和らげ手段」(atenuante) である。和らげ手段とは, 「述部の意味を, 記述された対象に部分的にしか適用されないことを示す形で修正するのに役立つような, 小辞・単語・表現」として定義される (p.209)¹⁴⁾。そして具体的な和らげ手段として, 英語の a sort of に相当する como, そして un poco や示小辞が紹介されている (詳細は3.3.項)。

2.3.2. Vigara (1992)

語用論の分野でスペイン語の口語の形態統語論を研究している研究者に Vigara Tauste がいる。1992年出版の著書の術語索引によれば, 彼女は lítote ということばは使っていないものの, atenuación という術語をスペイン語学の伝統的な意味で使用していると思われる (1992: 393)¹⁵⁾。まず, 「論理的に, 話し手はそれぞれ, 話し相手に一層よく作用するために, 話し相手のことを考慮する独自の方法や好みの方法を持っており, その方法には何種類かの仕組みがあるものの, 口語表現では基本的に2種類のタイプが問題になる。それはきっぱりとした表現に対する atenuación と, 意見の挿入である」¹⁶⁾ とする。そしてそのような atenuación の目的は「私たちが表現することを, 話し相手が一層よく受け入れてくれるようにする」ためである, と定義している¹⁷⁾。

2.3.3. Briz (1995)

他方, 何人かの語用論研究者が lítote という術語を使って和らげ表現の説明をしている。たとえば Briz (1995: 106) であるが, 彼は No me cae muy bien 「私には十分にはしっくりこない」という例文をあげて, 「lítote とはマイナスの語義である反義語 (mal 「不十分に」) のかわりに, 否定されたプラスの語義の形容詞 (bien) を使うこと」と説明している。彼にとって lítote とは, 反義表現の否定であることになる。

3. スペイン語の *atenuante* 「和らげ手段」について

atenuación という術語は修辞学の *lítote* とつながっているし、修辞学でも研究者によって術語の定義が異なっているので、本稿での定義を明確にしておこう。そしていくつかの「和らげ手段」を紹介する。

3.1. 「和らげ表現」の定義

今後の研究のためにも、ここで筆者が望ましいとする定義を紹介しておこう。それは1.2.項のモリネルの定義と2.2.項で引用した佐藤の定義で構成されたものである。すなわち「自分が相手に与える印象を悪くしないために、そして相手の好意を導き出すために、表現の断定性を和らげる表現」ということになる。あくまでも暫定的な定義であるから、今後の研究によって修正されることもあろう。このような表現のためにはどのような手段があるのであろうか。

3.2. 「和らげ手段」の種類

いわゆる *atenuante* であると解釈されている表現手段は数多い。その分類のいくつかを要約してみよう。

A. Moliner (2007: 297) の列挙

モリネルはその辞書の見出し語である *atenuación* と *atenuar* の記述のなかでいくつかの表現手段に言及している。要約してみれば「拒絶されたことに対して、和らげられた代案を提示する一連の接続詞的表現」、「発話内容を和らげる配慮を指摘する接続詞的・副詞的表現手段」、「概念内容の唐突さを表現によって和らげる表現手段」、「肯定のかわりに逆の内容の否定」、「直説法のかわりの可能法・接続法」、「保留の諸表現」、「第三人称による待遇」などである¹⁸⁾。

B. Mayer-Hermann (1988: 284-5) の列挙

彼は自分の論文を試験的研究と呼んでいるが (nota 9), そのような性格のもとに *Operadores de atenuación* (和らげ表現のオペレーター) と呼ぶ表現手段は、暫定的として以下のようにまとめられている。動詞の時制 (単純未来, 過去未来, 直説法未完了過去, 接続法過去, 接続法現在など), 小辞・副詞 (*tal vez*, 付加疑問, *posiblemente* など), 動詞 (*creo que; pienso que; supongo que; parece que; me imagino que; sugiero que; deber de* など), メタ言語的発話行為 (*se puede decir; así entre comillas; lo que sea; digamos; si quieres; es de suponer; en mi opinión* など) である。

C. Haverkate (1994) の和らげ手段

彼は上記の2.3.項で紹介したように小辞の *como* や副詞の *un poco* をあげているが、そのほかにもいくつかの表現手段に言及している (括弧のなかは頁数)。動詞の時制 (直説法, 接続法, 過去未来) (129, 190, 192), 無人称表現の *se* (133) ・ *tú* (134) ・ 一人称複数 (137), 時制形式

と助動詞による4段階の和らげ表現：concretaría → quería concretar → querría concretar → quisiera concretar (144) などである。

D. Briz (1995: 105–6) の列挙

彼はまず、和らげ手段には形態的手段、語彙的手段、音声的手段、統語的手段があるとして、いくつかの方法を列挙している。たとえば示小辞、un poco, como, algo, 迂言表現 (ir a + 不定詞), 2.3. 項で紹介した lítote, 尻切れトンボの省略表現 (Es un ... など), 叙法の動詞と時制の組み合わせ (¿Podría venir a jugar yo también?), ステレオタイプの語彙 (perdón), 第三人称での待遇 (usted) などである。この論文で Briz は、和らげ表現が和らげの対象にするのは、発話内行為の力 (fuerza ilocutiva) と発話された内容の両者であるとする (p. 109)¹⁹⁾。

E. Puga (1997) の分類方法と列挙

チリ人の Puga が書いたこの文献は、Antonio Briz の研究拠点でもあるバレンシア大学で作成して提出した博士論文に基づいている。彼女は和らげ表現を「発話者 (emisor), 伝達内容 (mensaje), 発話の相手 (destinatario), 経路 (canal)」に対して距離を置く振舞い (gesto de tomar distancia) であるとして (p. 13), 第3章でチリの実際の発話を分析しているが、論じる対象は Briz (1995) の言う atenuación pragmática performativa 「発話内行為の力を和らげる表現」が中心になる。そしてチリに特有の和らげ手段を列挙している (pp. 90–95)。それらは「語彙と慣用句の手段」(recursos léxicos y fraseológicos) と「形態統語論的手段」(Recursos morfo-sintácticos) に大別されている。前者に含まれているのは absolutamente²⁰⁾; como; como mucho; de repente; medio; un poco; en una de esas; no sé si quiero; no pasa mucho などであり、後者に含まれているのは「迂言形式の動詞句」(perífrasis verbales), 「示小辞」(diminutivos), 「疑問文形式」(oraciones interrogativas) である。筆者が調べた限りでは、Puga は lítote という術語を使用していない。

3.3. いくつかの「和らげ手段」

スペイン語では、和らげ表現の手段としてさまざまな言語要素が使われていることが分かった。本稿ではそれらのおおまかな分類として、Puga が提案している「語彙と慣用句の手段」と「形態統語論的手段」の大別に注目したい。「形態統語論的手段」には動詞の迂言形式や示小辞などが、そして「語彙と慣用句の手段」には como や un poco が含まれている。

本稿の 2.3. 項で紹介したように、Haverkate は「和らげ手段」を「述部の意味を、記述された対象に部分的にしか適用されないことを示す形で修正するのに役立つような、小辞・単語・表現」と定義している。何人かの研究者はその具体例として un poco と示小辞を挙げている。un poco は「語彙と慣用句の手段」に、示小辞は「形態統語論的手段」に属することになる。

3.3.1. 「形態統語論的手段」としての lítote (緩叙法)

まず、修辭学で使われてきた lítote であるが、定義によって微妙にその意味が異なるものの、

本稿の第2節で見てきたように、現在でも修辞学の用語として、あるいは語用論の用語として使用されている。筆者はこの術語を、2.3.項で明示したように、2.2.項で紹介した佐藤の「(1) 反義表現を否定する表現方法」に限定して使用するよう提案したい。そしてこの手段は「和らげ表現」のための「形態統語論的手段」のひとつであるとする。

3.3.2. 概念の小ささを表現する *un poco*

語彙の *un poco* は肯定的な表現で「少し」の意味を持っている。この副詞句についてスペイン語の語用論研究者がよく引用するのは Beinhauer の一節 (1968: 154) である。その一節は第2章「丁寧表現」(Cortesía) のなかの「文体的現象」(Fenómenos estilísticos) に含まれているが、そこでは「スピッターはイタリア語における *poco* の婉曲表現的用法に向けて注意を喚起しているが、その用法はスペイン語にもある。飲んだくれの人についてさえ、Está un poco alumbrado『(彼は) 少し飲んでいる』と言うことがあるからである」と述べている²¹⁾。スピッターはこれを婉曲表現的用法と呼んでいる。同書の索引からも判明することであるが、この例文では *un poco* が mucho「とても多く」の婉曲表現として使われているのである。とすれば、mucho のかわりに *un poco* を使用するのでは和らげ表現にほかならない、ということになる²²⁾。

Leech (1983: 147-8) は litote の表現方法のひとつとして度合いの過小評価の副詞 a bit, a little, a little bit に言及し、それらがマイナス的に評価される意味のことばの修飾に特化されていることを指摘している。そして Haverkate (1994: 210) は Leech のこの指摘を引用し、述部への外的な修正の手段のひとつとして、*un poco* の副詞としての和らげ表現機能 (función de adverbio mitigador) について論じている。

Vigara Tauste (1992: 394-6) も口語における *un poco* の多用の現象を un-poquismo (「*un poco* 多用現象」と呼んで指摘している。そして(後述の como と同じく) その多用にもかかわらず、統語的にも論理的な意味表現の点からも盲腸のように不要なものであるが、対話者間の談話の流れを良くするための典型的な相互作用手段として働いている、と解説している²³⁾。

他方、示小辞であるが、Beinhauer (1968: 155) はこれについても、それらが特に「形容詞や副詞に加えられると、時として和らげ手段として使用される」と断言している²⁴⁾。Haverkate (1994: 210) はこの指摘を引用し、述部の内的の形態的な修正の例として示小辞に言及している。

スペイン語のネイティブの発話には、*un poco* と示小辞を併用する例も少なくない。たとえば筆者の同僚のスペイン人が、授業中に態度の良くない学生についてコメントしながら、Ese chico es un poco rarillo。「あの男子学生は少し変だよ」と言ったことがある。ここで注意すべきは、概念の小ささを表現するこれら2種類の表現手段も、書きことばであれ話しことばであれ、やはり文脈の情報によってその和らげ表現であるという解釈が可能になることである。示小辞については、その他のさまざまな文体論的価値を表現している可能性もある²⁵⁾。

3.3.3. 小辞の como

「語彙と慣用句の手段」の como については、1981年に Montes が、南北アメリカのスペイン語圏に共通の現象としてその研究を発表している。しかしこの先駆的な論文はその後の研究においてしかるべく引用されていない²⁶⁾。Montes はこの como の口語的な性格を指摘し、その機能を「いつも、肯定されることの度合いを低めたり肯定されることを弱音器にかけたり、きっぱりとした断言の内容にかかわりたくないというような和らげ表現のニュアンスを加える」²⁷⁾と定義しつつ多数の用例を紹介している。

上記の 3.3.2. 項の注 23 で引用されているように、Vigara Tauste (1992: 394-6) は話しことば特有の現象としてのこの como の多用を comismo (「como 多用現象」と呼んでいる。この小辞も彼女にとっては、un poco と同じように、メッセージの内容には何の意味も加えない。Haverkate (1994: 209) も、英語の術語 hedge に対応するスペイン語 atenuante (和らげ手段) の例として、英語の a sort of と対比されうるこの como を紹介している。

この用法の成立過程を説明したものに、最近アルゼンチンで出版された Aragón (2009: 337-8) がある。この「問題用法の辞書」の見出し語 como の語義説明の第 2 項は次のようになっている。「(スペインの) アカデミアの辞書に記載されている名詞と形容詞、あるいは動詞とその被制辞の間で使われる『～に似た』の意味の como の構文: se quedó como muertos 『彼は死人のようになった』; se encontró con dos como estudiantes 『彼は学生のような二人と出会った』; tiene un aspecto como enfermizo 『彼には病的な様子がかがかわれる』から、この小辞の意味が『少し、いくばくか』に拡張され、llegaron como cansados 『彼らは少し疲れて到着した』; el examen fue como difícil 『試験は少し難しかった』; su conversación es como más agradable 『彼の会話はいくらか一層心地よい』のように使われている。ときには estoy como muy contento 『私はとても満足している』でのように、como がまったく余計なものとなっている。(…) アルゼンチンではこの用法がいやというほど使われている」²⁸⁾。

4. スペインの一般語と南北アメリカスペイン語

スペイン語の語用論で論じられる atenuación という現象は、スペインの一般語と南北アメリカのスペイン語とでその使用状況が異なっているという指摘がある。後者での使用頻度が大きいということである。すぐ上で Aragón の記述を紹介した。ほかの何人かの研究者の指摘を紹介しておこう。なお、ポライトネスという観点からスペインとスペイン系アメリカと対比した研究に関しては、本稿の「付記 (1)」で紹介されている Palencia & García (2007) が詳しい。

4.1. Montes (1980-81)

まず、上記の 3.3.3. 項で言及された Montes である。彼は問題の como の使用に関して、この

用法は Kany が言うように、スペインでも南北アメリカでも使われているが、後者においてはその使用頻度がずっと高いし、統語的・機能的な種類もずっと多いとする理解が正しいであろう、と言っている²⁹⁾。Montes はさらに、そのような多用の動機として、南北アメリカに見られる、社会心理学的な要因である丁寧表現への傾倒を挙げている (p.673)。この傾倒について、como の使用に限定はしているが、つぎのように結論づけている (p.674)。「ここで検討された要素の機能は基本的に和らげ表現である。そしてそれは多分、植民地にされた新大陸の大衆の、ある種の気弱さの反映であると解釈されうるであろう。スペインの話しことばに対してスペイン系アメリカの話しことばの婉曲表現的・超丁寧表現的な性格が何度も力説されてきた。この como の一層大きな繁殖はこの (南北アメリカの) 特徴のなかにすっぽり収まるのではなからうか。」³⁰⁾

4.2. Briz (1995)

スペインにおける和らげ表現の特徴を検討する Briz (1995) は、和らげ手段を、対話の相互作用において意味論的な修飾要素としてだけでなく語用論的な修飾要素としても機能するものとしてとらえ、その果たす役割を際立たせることを目的にしている (103)³¹⁾。そしてスペインの自由な対話における和らげ表現の特徴として、それは話し相手との間に社会的な距離を置くためのものではなく、会話の方略であるという性格が強い、と述べている (p.122)³²⁾。敬語の機能の基本のひとつが、話し手が敬意の対象とする話し相手などと適切な距離を保つことであるとすれば、スペインのスペイン語における和らげ表現は、Briz によると、基本的な意味での敬語には属さないことになる。しかしこれとは反対の解釈も存在する。たとえば次に紹介する Puga である。

4.3. Puga (1997)

Puga は本稿の 3.2. の E 項で見てきたように、和らげ表現を、談話を構成する (話し相手を含む) 諸要素から距離を置く振舞いであると想定している。そのように理解したうえで、「和らげ表現の度合いはスペインよりチリのほうが大きい」という仮説を提示している (p.14)³³⁾。Puga は第 5 章で、スペイン語における和らげ表現の生産性がスペインよりチリのほうが大きいことの理由として、チリにおける社会の階層化と先住民文化の影響を挙げている。彼女は *cortesía* (丁寧表現) を「単なる *cortesía*」と「主人 = 召使い型の *cortesía*」³⁴⁾ に分けているが、社会の階層化という事情は後者の型の *cortesía* に関連しており、つぎのように述べている。「(この型の丁寧表現においては) 和らげ表現は基本的に、低い階層の話し手が高い階層の話し相手に話しかける時に現れる。チリの社会の際立った階層化は、和らげ表現の生産性がスペインよりもチリで一層高いという現象を説明するのに役立つ要因のひとつである。スペインではこの階層化がずっとおだやかなのである」(p.14)³⁵⁾。

4.4. Briz (2007)

この論文で Briz は、上記の 4.2. 項で述べた、やわらげ表現の特徴は「話し相手との間に社会的な距離を置くためのものではな」という表現を、「和らげ表現は言語的に距離を置く方略であり、社会的に接近をもくろむ方略である」のように変更している (p.37)³⁶⁾。言語表現のレベルとその社会的効果のレベルを分けて定義しているのである。そして和らげ表現の使用の実態はスペインとスペイン系アメリカでは確かに異なっている、という結論に達している。一般にスペイン系アメリカではスペインでよりも和らげ表現が盛んであり、スペインには慣習的な丁寧表現の使用が（スペイン系アメリカにおいてよりも）少なく、本質的に丁寧表現に結びつく和らげ手段の使用はずっと少ない、という分析結果を提示している³⁷⁾。

4.5. スペインの古用法と現代の南北アメリカの用法

南北アメリカのスペイン語にみられる特徴の多くが、スペインの古典期あたりにも見られる。この両者の間の関連性という問題は、20世紀初頭から長い間、論争の対象になった。この問題については、Lapesa (1981, 2004) もその第17章で詳しく述べている。20世紀の後半から開発され始めた語用論のなかの *atenuación* についても、その数は少ないもののスペインと南北アメリカの使用実態の違いを指摘する研究が出始めている (Antonio Briz や Puga など)。しかしスペインや南北アメリカの現代スペイン語とスペインの古い用法との対照というテーマはどうであろうか。Montes は何人かの見解にもとづいて「(問題の *como* の使用は) スペインでは古典期から現代の間に減少したのであるか」と問うている (p.672)³⁸⁾。スペイン語について *atenuación* を研究するには、この通時的テーマにも注意を払う必要があるのではなかろうか。

この筆者の指摘に関連する見解が、本稿の付記 (1) で紹介されている Palencia & García でも提示されている: 《the different speech activities and domains in which politeness can be studied can be examined synchronically and diachronically. The majority of studies on politeness are synchronic. However, it would also be of interest to examine, [...], the changing perceptions of politeness in Peninsular Spanish and other varieties of Spanish》(2007: 376)。

5. 新たな仮説

筆者はこれまでに一度、*atenuación* という考え方を援用して、スペイン語のスペインとスペイン系アメリカでの用法の違いを説明しようと試みた。新たな和らげ手段の提案である。

5.1. Miyoshi (1999) : *acá—allá*

南北アメリカスペイン語では、場所指示の副詞である *acá—allá* (漠然性のある「ここ」—「あそこ」) が *aquí—allí* (点的指示の「ここ」—「あそこ」) と比べて、スペインよりも使用頻度が

高い、という指摘がある。Miyoshi (1999) で引用された指摘のほかにも、20世紀の後半に出版された一般的な解説書の M. Seco (1967), Butt & Benjamin (1989), Saralegui (1997)³⁹⁾ や、21世紀初頭に出版された Frago & Franco (2003)⁴⁰⁾ に、そして現代スペイン語学のこれまでの研究成果をまとめて、広く受け入れられている見解を集大成したアカデミア (スペイン国語翰林院) の最近の出版物 *Real Academia Española et al.* (2010)⁴¹⁾ にも、同趣旨の指摘がある。しかしながら、スペイン語の *atenuación* に関して筆者が参照した研究には、この場所指示の副詞に和らげ手段として言及したものはない。

筆者がこの現象に関して1999年に発表した論文では、まず、いくつかの先行研究を紹介した後で、*acá/allá* の場所指示の漠然性に注目した。つぎに Madrid, Caracas, Buenos Aires, Bogotá, Ciudad de México の現代教養語コーパスを調べて *acá-allá*・*aquí-allí* の使用頻度の違いを示した。スペイン系アメリカのほうで使用頻度が一層大きいことは、先行研究の通りであった。そして Mulder (1991), Haverkate (1994), Briz (1995) などから指示の漠然性が和らげ表現の成立の条件であることを考慮し、*acá-allá* の使用頻度がスペインよりスペイン系アメリカで大きいという南北アメリカスペイン語の特徴が、語用論でいう丁寧表現手段のひとつになるであろう、ということ、Montes (1980-81) (cf. 上記 4.1. 項) を援用して、仮説として述べた⁴²⁾。現代スペイン語におけるスペインと南北アメリカとの用法の違いについて、その違いが生まれた動機に関する仮説を提示したのである。これは「語彙と慣用句の手段」に属する和らげ手段のことになる (cf. 3.3. 項)。

5.2. Miyoshi, *et al.* (2011)

筆者には Miyoshi (1999) の発表のあと、しばらくしてこの論文には何かが欠けているのではないかと疑う気持ちが生まれた。直接の原因は Kany である。Kany は現代スペイン系アメリカの *como* の特別な使い方を論じつつ、その通時的な特徴にも触れている。*como* の和らげ表現としての用法は、古くはスペインでも使われていた、と指摘しているのである⁴³⁾。筆者はさらに、Kany が *acá-allá* についても通時的な特徴に言及していることに気付いた。彼はスペイン系アメリカの、とくにアルゼンチンやアンデス地方で、*aquí* のかわりに *acá* が、ほとんど独占的に使用されていると指摘したあと、この用法は古いスペインの用法に由来するが、16世紀スペインの神秘主義作家であるサンタテレサなどは特にその傾向が強い、と述べている (1963: 269)⁴⁴⁾。そこで *acá-allá*・*aquí-allí* の問題については通時的なチェックも必要であると考えて、2011の論文を作成した。

5.2.1. 現代語の出現頻度

まず、大規模な現代スペイン語コーパスの CREA を利用して、スペインとスペイン系アメリカ 12 ヶ国の *acá-allá*・*aquí-allí* の出現頻度を調べてみた。*acá* と *aquí* の合計のうちで *acá* の占める割合は、スペインで 2% だが、ベネズエラ・ボリビア・チリで 10% 強、ペルーで 19%、ラ

プラタ地方ではウルグアイで20%、アルゼンチンで25%であった（コーパスの資料に偏りがあるのか、パラグアイでは64%であった）。そして *allá* と *allí* であるが、これらの出現総計に前者が占める割合は、スペインで28%であり、キューバとボリビアでは似たような割合になるが、メキシコ・コスタリカ・ベネズエラでは半数以上を占め、その他の国では30%から41%の間に相当する⁴⁵⁾。

5.2.2. スペインの中世末と近世初頭

つぎに、スペイン語の通時態コーパスである CORDE を使って、スペイン語が新大陸へ移植される時代の *acá-allá*・*aquí-allí* の使用状況を調べてみた。15世紀末の1492年には上記と同種の割合が、*acá* も *allá* も15%であった。そして16世紀末ごろ（1580–1615）では、*acá* が同じく15%、*allá* が少し増えて20%であった。この時代に多くの作品を書いているサンタ・テレサ Santa Teresa de Jesús であるが、CORDE に含まれている作品での割合は *acá* が28%、*allá* が52%で、ともになりに頻度が高いが、この作者の場合には両者がそれぞれ抽象的な「この世」と「あの世」の意味で使用されていることが多いと思われるので、その状況を、作品のひとつである *Las Moradas* で調べてみると、*acá* の場合には文脈から「この世」の意味で使われていると判断される割合がその81%、*allá* はそのすべての場合に「あの世」の意味で使われている可能性が高かった。

スペイン系アメリカの現代スペイン語における *acá-allá* の *aquí-allí* に対比された使用頻度はスペインの中世末期や近世初頭の使用傾向に似ていた。

5.3. 両文献から判明したこと

この両者の調査から以下のことが判明する。スペイン語の場所指示の副詞の2系列（*-á* 系列と *-í* 系列）については、スペイン系アメリカではスペインよりも *-á* 系列の使用頻度が高いと言われているが、その指摘は、地域によって違いがあるものの、CREA でも確認することができた。他方、この傾向は、スペイン語が新大陸に移植される時代に見られたスペインの傾向とよく似ていることも分かった。

現在のスペイン系アメリカでは、指示される場所の概念に漠然性が伴う *-á* 系列の副詞の使用頻度が大きいことは、語用論的に解釈すると和らげ表現に相当するのではないかと考えられる可能性がある。しかしながら、同様の傾向がスペインの古い用法にも見られた。その場合、つぎには、古いスペインに見られる問題の傾向が和らげ表現と結びつけられるのかどうか、が問われよう。残念ながら今のところ筆者にはその判定の手掛かりがない。Miyoshi (1999) の語用論的解釈は、あくまで仮説の域にとどまることを認めなくてはならない。

また、このような仮説を信憑性の高いものにするためには、*-á* 系列が実際に漠然とした場所を指しているのか、明確に規定できるような場所概念の場合にも *acá-allá* を使っているのか、という点について一層丁寧な確認作業が求められよう。

6. まとめ

本稿で検討した内容から、以下のような点を指摘しておこう。

6.1. *lítóte* と *atenuación*

古典的レトリックの術語である *lítóte* は、スペインでは伝統的な用語である *atenuación* と同義であるという解釈がある。同じ仕組みの発話であるが、前者は話し手が発話によって相手の好意を導き出すための技であり、後者は話し手が話し相手への負担を少なくしてポライトネスの効果を発揮するための工夫である。そして *lítóte* は、ポライトネスの表現手段の一部である(第1項と第2項)。

6.2. 和らげ表現

本稿では和らげ表現をポライトネス表示の手段であり、「自分が相手に与える印象を悪くしないために、そして相手の好意を導き出すために、表現の断定性を和らげる表現」であると定義した(3.1.)。そして表現の断定性を和らげるには様々な手段のあることがわかった。第3項ではスペイン語の様々な和らげ表現を紹介した。著者によりそれぞれ独自の基準に従って定義され、その表現手段が提示されている。そのなかにはメッセージの伝達という点からは不要であると解釈されるものもある(注23)。

6.3. スペイン語の和らげ表現

広い地域で多くの人に使われているスペイン語には色々なバリエーションがある。そしてスペインとスペイン系アメリカでは和らげ表現の使用頻度が異なるという傾向が指摘されている。第4項ではその様子を紹介した。さらに、それらのバリエーションのなかには、スペインの古い用法との関連を考慮しなくてはならないものもある。これまでの和らげ表現の研究では言及されなかった表現手段のなかには、そのバリエーションの存在理由が、和らげ表現という考え方を使うと説明可能になる、と思われるものもある(第5項)。

6.4. 和らげ表現の仕組みと手段のまとめ

最後に、はじめに触れた資料である Antonio Briz を紹介しておこう。Briz については第4節で Briz (1995) (4.2.) と Briz (2007) (4.4.) を紹介した。Briz (2011) では、これまでとは違った視点から和らげ手段が分類されている。統語論や意味論の概念もかなり広くカバーされており、客観的にも十分な説得力を備えている。

まず、当該論文の目的であるが(p.3の Resumen)、和らげ表現の機能と形態を分析することによって、語用論の範疇としての和らげ表現の概念を具体化することである。方略としての

和らげ表現はコミュニケーションの近接性の度合いの大小と関連付けられるという⁴⁶⁾。

結論 (p.17 の第6節) としては, Briz (2007) と同じく, 語用論の範疇としての和らげ表現はメッセージを遠ざける方略である (*una estrategia de distanciamiento del mensaje*) とするが, さらに, そのことによって発話者はその発言の一部 (あるいはすべて) に責任を負わないので, 発話者が負うべき義務は小さくなる (*que su compromiso sea menor*) という⁴⁷⁾。和らげ表現は相互作用による方略的活動 (*actividad estratégica interaccional*) であるが, それは発言の力を弱めるという和らげ表現のための論争的な (*argumentativa*) 活動であり, 緊張と対立を避けるための会話的な (*conversacional*) 活動であり, 他者との接近を図る社会的な (*social*) 活動である。そしてこの活動を通して目論まれるのは, 予定された目的の達成であり, (たとえ社会的だけだとしても) 他者の合意や承認の獲得である。

第2節では (pp.5-6), 特定の言語表現手段が和らげ表現の手段であるかどうかの認定に関して, 文脈情報を考慮することの重要性が指摘されている。たとえば, 叙法動詞の *poder* 「～する可能性がある」だが, *puede que llueva* 「雨が降るかもしれない」のように単なる可能性が表現されている場合には一般的な意味付加の要素であり, 和らげ表現の手段にはなっていない。しかし *Mañana nos vemos ¿eh?* 「明日お会いしませんか」と誘われて断る場合の *Puede que tenga que trabajar* 「仕事しなくてはならないかもしれないので」の *poder* は和らげ表現の手段になっているのである (cf. 3.3.2.)。

和らげ表現の機能については, その表現が提示者 (話し手, *el yo*) だけのものか, あるいは提示者-受理者 (話し手-聞き手, *yo-tú*) のものかを区別することができる (pp.7-8, 9-10)。和らげ表現は表現内容だけではなく, 相互作用の行為者にもかかわるのである。具体的には以下の2種類の機能を分けて考える必要がある。ひとつは話し手の役割に結びつけられる和らげ表現 (*se vincula al papel del yo*) で, 独白的な談話単位に関連し, 話し手の保護 (*salvaguarda*) を求める和らげ表現 (*atenuación del hablante*) であり, 仕組みは話し手中心 (*mecanismo auto-céntrico*) 的である。方策としては「話し手の無人称化」や「話し手の言動の相対化」が考えられる。そしてもうひとつは, 話し手-聞き手の関係に結びつけられる和らげ表現 (*se vincula a la relación yo-tú*) で, 対話という談話単位に関連し, 話し手自身と話し相手のフェイス (*imagen*) の保護を求める表現 (*atenuación de hablante y oyente*) であり, 仕組みは聞き手中心 (*mecanismo alocéntrico*) 的である。方策としては「話し手のみならず, 聞き手の無人称化」と「メッセージの相対化」がある。

さて, 肝心の和らげ表現の手段である (pp.8-9)。その方略は2種類の方策群 (*tácticas*) に分けられている。

ひとつの方策群は「話し手-聞き手の隠蔽」(*ocultación*) を目指す。言いかえれば不定化 (*indeterminación*), 人称の隠蔽 (*despersonalización*), 行為者の隠蔽 (*desagentivación*) である。具体的には, たとえば無人称表現, 一般化表現 (*todo el mundo* 「みんな」など), 行為者隠蔽

の表現（再帰受動文や「私がデータを分析した」のかわりの「データの分析」）がある。

もうひとつの方策群は「表現内容の相対化・不定化」を目指す。語や文の意味を曖昧で不明確にする方策である。疑問・可能性・不確かさなどの表示によって責任が回避される。具体的な相対化の方策としては、ある種の行為遂行的動詞の使用（no saber「知らない」、parecer「思える」、creer「思う」など）、談話マーカーの使用（様態指示のal parecer「見たところ」、en mi opinión「私の考えでは」、a lo mejor「おそらく」などや接触調整語のoye, mira「ねえ」など）、和らげ表現を強めるような行為遂行的表現（時制や法の交代やen mi modesta opinión「愚見では」のように本来的に和らげる意味の形容詞の使用）、譲歩的な表現（bueno, pero ...「結構ですが、しかし...」など）、発話の中断を含む間接表現の構文の使用、いくつかの言い換えの表現の使用（estás gorda o sea te sobra algún kilito「あなた、太っているというか、何キロか余っているわね」など）などがある。そしてこの方策群には語用論的に和らげ表現となる表現手段が含まれる。たとえば、示小辞（diminutivos）の使用、接近表示語（aproximadores）とも呼ばれる数量詞（más o menos「多かれ少なかれ」など）や和らげ表現的小辞（como～「～ほど」など）の使用、表現内容に関する責任を回避するような直示語（deícticos: ahí「そこ」、allí「あそこ」など）や代用語（algo así「大体そんなように」など）、緩叙法（litote [sic]）の現象の使用（está mal「悪い」の代わりにno está bien「良くはない」など）などがある（最後には本稿が扱ってきた修辞学の緩叙法が挙げられている）。

スペイン語に関する和らげ表現の研究は、今後どのように展開され、どのような成果を提供してくれるのであろうか。和らげ表現に限らず、広く発話行為という視点から再検討すれば、スペイン語のバリエーションの、いくつかの言語的特徴の存在する動機が明らかになるのではなかろうか。Puga (1997: 111) も自身の研究のメリットのひとつとして、言語学的成果と語用論的解釈の統合を挙げている⁴⁸⁾。本稿の筆者も Puga とともに、このような学際的研究の開発されることを期待したい。

付記 (1)：スペイン語のポライトネス研究と mitigation

Palencia & García (2007) はスペイン語世界のポライトネス研究の歴史と現状、さらに今後の研究の可能な方向に関する著書である。スペイン語圏におけるポライトネス研究は Escandell Vidal (1996) と Haverkate (1994) によって 1990 年代の中ごろから始まるとして、その後のおよそ 10 年間に展開されたこの分野の研究を紹介している。和らげ表現にかかわる mitigation については数か所で言及されているが、そのなかで特に注目されるのは Carrasco Santana (1999) の論文である。Palencia & García (2007: 373) は《For this scholar [Carrasco Santana], [...], there are two types of politeness: mitigating and enhancing politeness》と紹介している。

Carrasco Santana (1999) はその論題 (Revisión y evaluación del modelo de cortesía de Brown

& Levinson) からもわかるように、Brown & Levinson の理論がポライトネス理論のなかの最良のものであるとしながらも、第 4.1. 項ではその face (スペイン語では *imagen*) に付加されている *positiva*・*negativa* という形容詞の曖昧さがポライトネスの概念にも適応されることから、さまざまな問題が引き起こされている、と批判する (p.21)⁴⁹⁾。人間には社会的な face があることは確かであり、Brown & Levinson はそれを *positive* と *negative* に二分している。ところがこの 2 側面には明確な区切りが存在せず、密接につながっているため、多くの丁寧表現の場合に、片方の側面にとっての脅かしが自動的にもう一方の側面への脅かしになると判断される (pp.35-6)。そこで Carrasco Santana は、*positiva*・*negativa* の形容詞を *imagen* にだけ使うことにして、丁寧表現には *mitigadora* と *valorizante* を使うことを提案する。注の 22 (p.22) によれば、*cortesía mitigadora* (和らげによる丁寧表現) は予防的な性格であり、追加という手段 (潜在的に脅威を与える中心的発話行為に付加される、和らげ機能のある下位的発話行為群) に訴えるし、*cortesía valorizante* (高評価による丁寧表現) は丁寧な発話行為を創造する性格のものである。また p.36 によれば、前者の手段として使われる一連の言語表現手段には代替手段と追加手段があるとし、後者が生み出す発話行為には話し相手の *negative face* と *positive face* を承認する機能があるとする。

Carrasco Santana の提案は、本稿の 2.2. 「修辞学の *litote*」で紹介した古典レトリックの分類における緩叙法と誇張法との関係に関連しているし、Leech が協調の原理に反する表現として挙げている *litotes* と *hyperbole* に対応している。興味深い現象ではある。いずれにせよ、丁寧表現の手段の多くが和らげ表現という視点からひとつに括られる可能性が主張されている点で、筆者は Carrasco Santana の提案を高く評価したい。

他方、アメリカ合衆国のテキサス大学オースティン校で博士論文を仕上げた Czerwionka (2010) は、実際の発話における *mitigation* を検証するため、メキシコの *Universidad Autónoma de Nuevo León* の 56 名の学生の協力を得て分析作業を行った。和らげ表現の使用を社会的動機 (聞き手への負荷の度合い) と認知的動機 (話し手の不確かさ) をキーワードにして分析している。

付記 (2) : 日本語語用論の配慮表現と和らげ表現

日本における西欧起源の語用論の研究は、その理論の紹介が 20 世紀の 80 年代に始まった。山岡など (2010: 26) によると、国語学 (日本語学) の世界ではその理論とは無関係に、20 世紀の半ばからいくつかの語用論的研究が発表されてきている。

Leech (1983: xi) によれば、語用論は *the study of how utterances have meanings in situations* と定義されるが、山岡などによれば (2010: 67)、その「語用論研究において、20 世紀終盤から急速に注目を集めているトピックがポライトネスである。ポライトネスとは、会話において、話者と相手の双方の欲求や負担に配慮したり、なるべく良好な人間関係を築けるように配慮し

て円滑なコミュニケーションを図ろうとする際の社会的言語行動を説明するための概念である」。おもに Leech や Brown & Levinson の理論である。20 世紀末頃にはその理論を日本語に適用し、その日本語への適応を検討する研究が出始めている。その成果のひとつとして、日本語学の分野では語用論のなかのポライトネスに関して、日本語に一層よく適した概念として「配慮表現」という術語が提案され、研究が進められている。

山岡などによると、この術語をはじめて使ったのは生田 (1997) であるが⁵⁰⁾、「対人的コミュニケーションにおいて、相手との対人関係をなるべく良好に保つことに配慮して用いられる言語表現」と定義されている。この定義の根拠であるが、Brown & Levinson のポライトネス・ストラテジーのなかで消極的ポライトネスに含まれているものの多くは「対人関係を損なわないようにする」ものだが、積極的ポライトネスのなかにも「対人関係をより良くしようとする」ものが含まれており、この両者を統合するための概念である (2010: 141-3)、という。

この配慮表現のなかには、本稿でいう「和らげ表現」に相当するものが含まれているものの、日本語の丁寧表現を「和らげ表現」的な視点から（あるいは mitigation という観点から）統一的に分析する研究は、筆者の知る限り、発表されていないようである。

注

- 1) «(1) Acción y efecto de atenuar. (2) Ret. Figura que consiste en no expresar todo lo que se quiere dar a entender, sin que por esto deje de ser bien comprendida la intención de quien habla. Se usa generalmente negando lo contrario de aquello que se quiere afirmar; p. ej. No soy tan insensato. En esto no os alabo».
- 2) «(2) Figura retórica que consiste en quitar de cualquier modo brusquedad o violencia a lo que se expresa, por respeto a la persona a quien se habla, por natural aversión del que habla a la expresión demasiado tajante, etc.».
- 3) «Lítote. |Alonso *Góngora* 289: Dice “no segundo” en vez de ‘primero’: es una atenuación, lo que en Retórica se llama lítote.»。なお Alonso は Dámaso Alonso のことである。
- 4) cf. Haverkate (1994: 117): «la cortesía asertiva consiste esencialmente en atenuar, de distintas formas, el contenido proposicional o la fuerza ilocutiva de la aserción. Lo que se aplica, pues, es una subestrategia de cortesía, o sea, mitigación». を参照した。なお、politeness を cortesía や「丁寧表現」の同義語として扱うことには問題があろう。ちなみに三省堂の『デイリーコンサイス英和和英辞典』では、“polite”は「丁寧な、礼儀正しい、洗練された、上品な」と、「丁寧な」は‘polite, courteous, kind, careful, thorough’となっているが、Ramondino の *The New World SPANISH-ENGLISH and ENGLISH-SPANISH Dictionary* では、“politeness”は‘cortesía; cultura’だが、“cortesía”は‘1. courtesy. 2. gift. 3. expression of respect. 4. bow; curtsy’であり、ここには politeness が含まれていない。
- 5) cf. M. Moliner: “Lítote(s). *En retórica, atenuación*”; DRAE: “Lítote, Lítotes, Litotes. Ret. Atenuación (figura retórica)”.
- 6) 英語の場合も 17 世紀中ごろから使用され始めたようだ。たとえば C. T. Onions の *The Shorter Oxford English Dictionary* には、«Litotes. 1657. *Rhet.* A figure, in which an affirmative is expressed by the negative of the contrary: an instance of this; e.g. *a citizen of no mean city*». となっているからである。
- 7) «ATENUACION. s.f. El acto de adelgazar, atenuar y reducir a menos alguna cosa: y asimismo el efecto de extenuarse, comprimirse y enflaquecerse».
- 8) また、アカデミアの辞書 (22 版) によると、retórica「修辞学」とは«Arte de bien decir, de dar al lenguaje escrito o hablado eficacia bastante para deleitar, persuadir o conmovér». 「上手に言う技芸であり、

(話し相手を) 喜ばせ、説得し、感動させるのに十分な効力を書きことばとか話し言葉に与える技芸」である。

- 9) «deliberate use of understatement, not to deceive someone but to enhance the impressiveness of what we say» (487); «Litotes is a form of meiosis» (488). なお、三省堂『デイリーコンサイス英和英辞典』では meiosis が「緩叙法」と訳されている。
- 10) politeness 研究については Brown and Levinson (1987) と井出祥子 (2006)、滝浦真人 (2008) を参照した。スペイン語における丁寧表現と「和らげ表現」についてはいくつかの論文を参照した。Mayer-Hermann (1988) は *atenuación* と *intensificación* をセットで論じている。それぞれの表現手段の一覧表は興味深い。Mulder (1991) は *positive politeness* を *aproximarse* 「接近する」という概念で、そして *negative politeness* を *evitar* 「避ける」という概念でとらえてスペイン語の丁寧表現を論じているが、後者の方略の4番目が *atenuación* になっている。Escandell Vidal (1995) は politeness 研究の歴史をたどっていて、とくに *atenuación* をテーマにしては論じていないものの、*“utilizar formas de expresión vagas o incompletas son maniobras que forman parte del repertorio habitual de recursos de cortesía (p.38)”* という指摘では、伝統的な丁寧表現とポライトネス研究が結びついていて興味深い。
- 11) «Así, la *atenuación* puede manifestarse a través de la realización performativa del acto de habla—véanse los ejemplos (54)–(56) y (107)–(108)—, mientras que, por otra parte, se expresa también mediante la referencia de persona y tiempo, como hemos visto en (64)–(66) y (104)–(106), respectivamente». ちなみに例文 54 は Querría concretar que 「～のように具体的に申し上げたいのですが」、107 は Le rogaría que 「(できたら) ～をあなたにお願いたいののですが」、64 は En la reunión de ayer se decidió que 「昨日の会合では～が決まりました」、104 は Sería bueno que fueras 「君が行くほうがいいのではないのでしょうか」である。
- 12) Haverkate は「和らげ表現」を指すのに、mitigar 系のことばを atenuar 系のことばとほぼ同義で使用しているようである (彼の著書の索引では “atenuar, *atenuación*, atenuante, véase: *mitigación*” となっている)。Leech などが英語で述べる語用論では to mitigate 系の用語が使用されている。しかしながらスペイン語では mitigar が «hacer menor o más soportable un dolor o una molestia física, o un padecimiento o inquietud moral» (M. Moliner) のように定義されており、なんらかの苦痛を和らげる意味に特化されているので、「和らげ表現」との対応語としては相応しくないとと思われる。
- 13) «se da por la negación de un lexema, evitándose la expresión directa del lexema de significado contrario».
- 14) «Podríamos definir el atenuante como una partícula, palabra o expresión que sirve para modificar el significado de un predicado de forma que se indique que ese significado sólo se aplica parcialmente al objeto descrito».
- 15) Brown & Levinson (1987) は引用されていない。
- 16) «Lógicamente, cada hablante tiene su propia manera o su manera favorita de *tener en cuenta al otro* (a su interlocutor) *para mejor actuar sobre él*. Aunque hay algunos mecanismos, a los que nos vamos a referir ahora, que aparecen sistemáticamente en la lengua coloquial, característicos de ella: básicamente de dos tipos: *atenuación de la expresión rotunda e incisos de opinión*».
- 17) «Objetivo: conseguir así una mejor aceptación de lo que decimos por parte de nuestro/s interlocutor/es».
- 18) それぞれの用例をあげておこう。「拒絶されたことに対して、和らげられた提案を提示する一連の接続詞的表現」Creo que no podré venir; *si acaso*, ya tarde, 「発話内容を和らげる配慮を指摘する接続詞的・副詞的表現手段」hasta cierto punto, 「概念内容の唐突さを表現によって和らげる表現手段」(eufemismo, ironía, lítote などの figuras de dicción), 「肯定のかわりに逆の内容の否定」(no es muy bueno. [これは修辞学の lítote に相当する]), 「直説法のかわりの可能法・接続法」yo querría un poco más de salsa, 「保留の諸表現」yo creo; yo diría; o me parece, 「第三人称による待遇」(usted のことか)。
- 19) Briz (1995) はこの対象の前者を *atenuación pragmática* と、後者を *atenuación semántica* と呼んで区別し、さらに *atenuación dialógica* を加え、和らげ表現の型を3種類に分類する方法を提案している。
- 20) Puga はここに、Kany (1960, 1963) が南北アメリカスペイン語の特徴として言及している用法のひとつである *absolutamente* を加えている。否定語を伴うことなしに独自で「全然(～ない)」の意味に対応する用法のことである。Puga (90) は、否定の和らげ表現の形式のひとつは否定の小辞を省略す

- ることである、と主張している (Una forma evidente de atenuar la negación es omitiendo la partícula negativa)。しかし特殊な文脈以外では否定辞を省略することができないはずである。
- 21) «SPITZER llama la atención sobre el empleo eufemístico en italiano de p o c o. En español sucede lo mismo (IU 73). *Está un poco alumbrado*, se dice incluso de quien está como una cuba».注の 50 には alumbrado が ‘bebido’ の意味であることが断られている。
 - 22) Beinhauer (1968) は atenuación を eufemismo の一種であると解釈している節がある。その術語索引の atenuación には “véase también: eufemismo” という指摘があるからである。
 - 23) «Surge así el *comismo* (término creado a imitación del «dequeísmo») y, si se quiere, el *un-poquismo*, que consiste en el uso /abusivo de estas expresiones a modo de apéndice-fantasma tanto desde el punto de vista sintáctico como del significado lógico. Obviamente, su sentido es «coloquial», y en este ámbito, aunque no conservan ni su función ni su significado originarios, se comportan como auténticos *recursos de interacción* que facilitan el fluir discursivo de los comunicantes» (pp.395–6).
 - 24) «A veces los sufijos *d i m i n u t i v o s*, sobre todo los agregados a adjetivos o a adverbios, también pueden asumir función de atenuantes».
 - 25) たとえば三好 (1981) を参照のこと。
 - 26) 筆者の調べた範囲では, Vigara Tauste (1992) にも Haverkate (1994) にも Puga (1997) にも Briz (1995, 2007) にも参照されていない。とくに Puga の場合, Montes の論文がチリ大学の研究雑誌 (別冊) に掲載されたのであるから, それを引用していないのは解せない。
 - 27) «En todos los ejemplos transcritos el *como* agrega siempre un matiz atenuativo, como de rebajar o poner en sordina lo afirmado, de no querer comprometerse con una afirmación rotunda» (p.671).
 - 28) «A partir de una construcción académica en que *como*, entre el sustantivo y el adjetivo o entre el verbo y su régimen equivale a ‘parecido a’: *se quedó como muertos; se encontró con dos como estudiantes* (ejemplos del DRAE); *tiene un aspecto como enfermizo*, se ha ampliado el significado de este nexa a ‘un poco, algo’: *llegaron como cansados; el examen fue como difícil; su conversación es como más agradable*. En algunos casos, *como* es totalmente superfluo: *estoy como muy contento* (=estoy muy contento) (...). En la Argentina se abusa hasta el cansancio de esta construcción».
 - 29) «quizá tenga razón Kany en considerar que, dándose tanto en España como en Hispanoamérica, es en ésta mucho más frecuente y con mayor variedad de distribución sintáctica y funcional» (p.671).
 - 30) «La función de la unidad examinada es fundamentalmente atenuativa, y quizá podría interpretarse en el plano sociolingüístico como reflejo de cierto apocamiento de las masas colonizadas del Nuevo Mundo. Más de una vez se ha recalado el carácter eufemístico e hipercortés del habla hispanoamericana frente a la española, y la mayor proliferación aquí de esta forma de atenuación encajaría bien dentro de esta característica».
 - 31) «intenta poner de relieve el papel que desempeñan en la interacción coloquial los atenuantes, no sólo como modificadores semánticos, sino también pragmáticos».
 - 32) «Según el corpus manejado, puede afirmarse que el atenuante en la conversación coloquial española se explica como estrategia conversacional antes que como modo de distanciamiento social».
 - 33) «nuestra hipótesis: la atenuación en el castellano de Chile es mayor que la que se manifiesta en el español peninsular».
 - 34) Puga はこの “cortesía señor-criado” という名称が Beinhauer のものであると断っている (102)。Beinhauer (1968: 115) は「私心のある丁寧表現」(cortesía interesada) の最初のところで, señor-criado を「ひとつの架空の関係」と呼んでいて, スペインにおける *servidor* などの丁寧表現手段を論じている。とくにスペイン系アメリカの特徴であるという指摘は見当たらない。
 - 35) «En esta última, la atenuación se manifiesta, básicamente, cuando un hablante de menor estatus social se dirige a otro de uno mayor. Podemos conjeturar que la marcada estratificación social de nuestro país es uno de los factores que contribuyen a explicar la mayor productividad de la atenuación en él que en España, en donde esta estratificación es mucho más tenue».
 - 36) «La atenuación es una estrategia de distancia lingüística y de acercamiento social».
 - 37) «Es cierto que no ocurre igual en España y en América. El español de algunas zonas de España pertenece a

- una cultura de más acercamiento que el de otras zonas de América, de acuerdo con una serie de rasgos examinados y, especialmente, el de la atenuación. Sí, en general, en América se es más atenuado que en España. Y sí, en general, en España existe menos cortesía ritual y es mucho menos frecuente el atenuante esencialmente cortés».
- 38) «¿Ha disminuido este uso en España desde la época clásica hasta el presente?»
- 39) Seco (1967: 8): «En algunas zonas de Hispanoamérica, *acá* ha desplazado prácticamente a *aquí*. Así ocurre, por ejemplo, en el habla popular y coloquial de Buenos Aires» (No se puede encontrar tal observación en la entrada de *allá*); Butt & Benjamin (1989: 326): «In the Southern Cone, and perhaps elsewhere in Spanish America, *acá* has more or less replaced *aquí*, even in good writing»; y Saralegui (1997: 49): «*Acá, allá* se prefieren, en general, a *aquí, allí*».
- 40) Frago & Franco (2003: 144): «Por último, habría que recordar la preferencia americana del adverbio *acá*, en lugar de *aquí*, y de *allá*, como sustituto de *allí*».
- 41) Real Academia Española *et al.* (2010: 340): (Refiriéndose a los adverbios demostrativos de lugar) «Entre las dos series [serie de las formas en *aquí, ahí, allí* y serie de las formas en *acá, allá, acullá*] existen varias diferencias, que se mencionan en el apartado siguiente. A ellas hay que añadir la de extensión geográfica, ya que el uso de *acá* y *allá* está mucho más extendido en el español americano que en el europeo».
- 42) Miyoshi (1999: 365) «Habrán algunos factores que condicionen, en la América hispanohablante, el empleo marcado de las dos formas en -á, frente a las otras dos formas en -í. Nosotros, fundamentándonos en lo que nos dice el profesor Montes, aventuramos una hipótesis sobre uno de los mismos factores. Es decir, la alta frecuencia de uso de las dos formas en -á en el habla culta hispanoamericana debe de encajar con su carácter de supercortesía».
- 43) 問題の como の用法に関して, Kany (1963: 382-3) は次のように述べている。«In the older language *como* alone was used in this sense; then *que* was added as a kind of expletive article. In many cases *como que* seems to be an ellipsis of *parece como que*, but generally the *como que* is a mere formula that has gradually become extended, perhaps by analogy with *como si*, though the nature of *como que* is expositive and that of *como si* is conditional. The expression is heard in Spain as well as in Spanish American zones, where the observer may hear extensions of it not familiar to the Castilian ear».
- 44) «The standard adverbs of place *acá* and *aquí*, both meaning 'here', differ in that *aquí* indicates more definite location, whereas *acá* indicates vague location or motion. Colloquially in the River Plate and Andean zones and elsewhere, *acá* is now used almost exclusively to indicate 'here' whether definite or indefinite. This usage stems from the older language. Santa Teresa was extremely partial to *acá*. The form *aquí* is being replaced by *acá*, of greater affective value, as is *allí* by *allá, donde* by *adonde*, etc.»
- 45) 単純な出現頻度だけを調べた。文脈の検討はされていない。
- 46) «Como estrategia, la atenuación se entiende vinculada a la situación de comunicación, en concreto, al grado mayor o menor de *inmediatez comunicativa o de coloquialidad*». なお, 後半は Briz が主導するバレンシア大学の口語体登録研究 (grupo para el estudio del registro colloquial) の研究者集団である Val.Es.Co. の研究成果が紹介されているが, 本稿ではこの部分には触れない。
- 47) 和らげ表現は当然のことながら「責任回避」のニュアンスを伴う。今日の日本語の, とくに若者ことばに特徴的な言い回しのいくつかについて, それを責任回避であるとして非難されることもあるが (たとえば水谷での「とか」), それは日本語が潜在的に蔵している和らげ表現への志向の表れではなからうか。
- 48) «El concepto de atenuación nos llevó a considerar una serie de características de nuestro castellano que por lo general se estudian de forma aislada. Nos permitió también tender un puente entre fenómenos lingüísticos y una actitud de los hablantes. Si la lingüística se ocupa del estudio de los primeros, hacen falta otras disciplinas humanistas para hacerse [sic] cargo de la actitud de los hablantes. Dejamos, de este modo, señalado un camino para emprender nuevos estudios de carácter interdisciplinario».
- 49) Cf. Palencia & García (2007: 382): «There is the added difficulty that some of Brown and Levinson's politeness strategies have given rise to confusion among researchers [...], with the result that some

interpret the same kind of utterance in similar contexts as a positive politeness strategy, with others seeing it as a negative politeness strategy».

- 50) この術語が提案されたいきさつは興味深い。本稿では便宜上、スペイン語の *cortesía*、英語の *politeness* を「丁寧表現」と訳しているが（注4を参照のこと）、この対応にも関連するので、この術語の生まれた状況を引用しておこう。生田（1997: 68）は次のように述べている。

言語学的な専門用語としてのポライトネスという語自体の意味について改めて考えてみる必要がある。この語は、たとえば日本語では丁寧表現、待遇表現、敬語表現、敬語行動、敬意表現などがあてられることが多いが、それが誤解を生むものとなっている。日本語には、精密な敬語体系が存在するため、ポライトネスの存在を意識しやすい反面、敬語の用法などにとらわれるきらいがある。あえてポライトネスというカタカナ語を用いているのは、それらの概念にとらわれないためである。Grundy（1995）によれば、そもそも英語でも *politeness* という用語が用いられることが混乱を招いていると言う。イギリスでの一般的な使われ方としては、*politeness* は、専ら消極的ポライトネスのことを指すからだとする。

すでに述べてきたように、ポライトネスは、当事者同士の互いの面子の保持、人間関係の維持を慮って円滑なコミュニケーションを図ろうとする社会的言語行動を指す。その意味では、ことばのポライトネスは「配慮表現」、言語的「配慮行動」などと呼ぶほうが適切かも知れない。ここで「配慮」と呼ぶのは、対人配慮、つまり相手に対する配慮だけではない。話者自身の面子保持、さらに両者の関係維持に対する総合的な配慮が含まれている。

参考文献

- 生田少子（1997）「ポライトネスの理論」, 月刊「言語」, Vol. 26, No. 6, pp.66–71。
 井出祥子（2006）『わきまへの語用論』, 大修館書店。
 佐藤信夫（1978）『レトリック感覚』, 講談社。
 三省堂編修所（1995）『デイリーコンサイス英和和英辞典』, 第4版, 三省堂。
 滝浦真人（2008）『ポライトネス入門』, 研究社。
 水谷静夫（2011）『曲り角の日本語』, 岩波新書。
 三好準之助（1981）「示小辞の基本的意味機能と文脈の意味分類の一基準」, 日本イスパニヤ学会誌 HISPANICA, 25号, pp.31–52。
 山岡政紀・牧原功・小野正樹（2010）『コミュニケーションと配慮表現—日本語語用論入門』, 明治書院。
 ラベサ, ラファエル（2004）『スペイン語の歴史』, 昭和堂（山田善郎監修, 中岡省治・三好準之助訳）。
 リーチ（池上嘉彦, 川上誓作訳）（1987）『語用論』, 紀伊國屋書店。
 Aragó, Manuel Rafael (2009), *Nuevo diccionario de dudas y problemas del idioma español*, Losada, Buenos Aires.
 Beinhauer, Werner (1968), *El español coloquial*, Gredos, Madrid.
 Briz, Antonio (1995), “La atenuación en la conversación coloquial. Una categoría pragmática”, en Luis Cortés Rodríguez (ed.), *El español coloquial. Actas del I simposio sobre análisis del discurso oral: Almería, 23–25 de noviembre de 1994*, Universidad de Almería, pp.103–122.
 Briz, Antonio (2007), “Para un análisis semántico, pragmático y sociopragmático de la cortesía atenuadora en España y América”, en *Lingüística Española Actual*, pp.5–44.
 Briz, Antonio (2011), “La atenuación como categoría pragmática”, en las *Actas del VII Congreso Internacional de la Asociación Asiática de Hispanistas*, Universidad de Estudios Extranjeros de Beijing, pp.3–21.
 Brown, P. & Stephen C. Levinson (1987), *Politeness: Some universals in language usage*, Cambridge University Press.
 Butt, John & Carmen Benjamin (1989), *A New Reference Grammar of Modern Spanish*, Edward Arnold, London, etc.
 Carrasco Santana, A. (1999), “Revisión y evaluación del modelo de cortesía de Brown & Levinson”, en *Pragmalingüística*, Vol. 7, pp.1–44.
 Corbett, Edward P.J. (1971), *Classical Rhetoric for the Modern Student*, Second Edition, Oxford University Press.
 CORDE: Corpus Diacrónico del Español, del Banco de Datos de la RAE (<http://corpus.rae.es/cordenet.html>),

- consultado en julio de 2010.
- Corominas, Joan (2000), *Breve diccionario etimológico de la lengua castellana*, tercera edición muy revisada y mejorada, Gredos, Madrid.
- CREA: Corpus de Referencia del Español Actual, del Banco de Datos de la RAE (<http://corpus.rae.es/creanet.html>), consultado en julio de 2010.
- Czerwionka, Lori Ann (2010), *Mitigation in Spanish Discourse: Social and Cognitive Motivations, Linguistic Analyses, and Effects on Interaction and Interlocutors*, Dissertation of Doctor of Philosophy, The University of Texas at Austin.
- Escandell Vidal, M. Victoria (1995), “Cortesía, fórmulas convencionales y estrategias indirectas”, *Revista Española de Lingüística*, 25, 1, pp.31–66.
- Escandell Vidal, M. Victoria (1996), *Introducción a la pragmática*, Ariel, Barcelona.
- Frago Gracia, J. A. & M. Franco Figueroa (2003), *El español de América*, Servicio de Publicaciones de la Universidad de Cádiz.
- Haverkate, Henk (1994), *La cortesía verbal. Estudio pragmalingüístico*, Gredos, Madrid.
- Kany, Charles E. (1960), *American-Spanish Semantics*, University of California Press.
- Kany, Charles E. (1963), *American-Spanish Syntax*, University of Chicago Press (edición española, 1969, *Sintaxis hispanoamericana*, Madrid).
- Lapesa, Rafael (1981), *Historia de la lengua española*, 9.^a ed. (Capítulo XVII: El español de América), Gredos, Madrid.
- Leech, Geoffrey N. (1983), *Principles of Pragmatics*, Longman, London and New York.
- Mayer-Hermann, Reinhard (1988), “Atenuación e intensificación (análisis pragmático de sus formas y funciones en español hablado)”, en *Anuario de Estudios Filológicos* (Universidad de Extremadura), Vol. XI, pp.275–290.
- Miyoshi, Jun-nosuke (1999), “Algunas reflexiones sobre ACÁ y ALLÁ”, en *Actas del XI Congreso Internacional de la Asociación de Lingüística y Filología de la América Latina. Las Palmas de Gran Canaria, del 22 al 27 de julio de 1996*, Universidad de Las Palmas de Gran Canaria, Tomo I, pp.359–365.
- Miyoshi, et al. (2011), “Una reflexión diacrónica sobre el uso de *aquí-allí* y *acá-allá*”, en *Acta Humanistica et Scientifica Universitatis Sangio Kyotiensis*, Humanities Series No. 43, pp.47–58.
- Moliner, María (2007), *Diccionario de uso del español*, 3.^a edición, Gredos, Madrid.
- Montes, José Joaquín (1980–81), “Sobre el *como* de atenuación”, en *BFUCH* (Boletín de Filología de la Universidad de Chile). *Homenaje a Ambrosio Rabanales*, pp.667–675.
- Mulder, Gijs (1991), “Aproximarse y evitar: estrategias de cortesía en castellano”, en *Foro hispanico, Vol. 2: Exploraciones semánticas y pragmáticas del español*, Ediciones RODOPI-B.V., Amsterdam, pp.69–79.
- Onions, C. T. (ed.) (1965), *The Shorter Oxford English Dictionary on Historical Principles*, Oxford.
- Palencia, M. E. & C. García (2007), *Research on Politeness in the Spanish-Speaking World*, Lawrence Erlbaum Associates, Mahwah, New Jersey and London.
- Puga Larraín, Juana (1997), *La atenuación en el castellano de Chile: Un enfoque pragmalingüístico*, Universitat de València.
- Ramondino, Salvatore (ed.) (1968), *New World SPANISH-ENGLISH and ENGLISH-SPANISH Dictionary*, World Publishing Company, New York and Cleveland.
- Real Academia Española (1969), *Diccionario de Autoridades*, Gredos, Madrid (1734, Madrid).
- Real Academia Española (2001), *Diccionario de la lengua española*, 22.^a ed., Espasa Calpe, Madrid.
- Real Academia Española & Asociación de Academias de la lengua española (2010), *Nueva gramática de la lengua española: Manual*, Espasa Libros, Madrid.
- Saralegui, Carmen (1997), *El español americano: teoría y textos*, Eunsa, Pamplona.
- Seco, Manuel (1967), *Diccionario de Dudas y Dificultades de la Lengua Española*, 5.^a ed., Aguilar, Madrid.
- Seco, Manuel et al. (1999), *Diccionario del español actual*, Aguilar, Madrid.
- Vigara Tauste, Ana. Ma. (1992), *Morfosintaxis del español coloquial: esbozo estilístico*, Gredos, Madrid.

On the Mitigation (Attenuation) of Spanish Language

Jun-nosuke MIYOSHI

Contents

1. What is the mitigation
 - 1.1. Dictionary of Real Academia
 - 1.2. Moliner
 - 1.3. Manuel Seco, *et al.*
 2. Function of mitigation
 - 2.1. Mitigation and litotes of Spanish
 - 2.2. Litotes of Rhetoric
 - 2.3. Mitigation and litotes of Pragmatics
 - 2.3.1. Haverkate (1994)
 - 2.3.2. Vigara (1992)
 - 2.3.3. Briz (1995)
 3. Mitigating means
 - 3.1. Definition of mitigation
 - 3.2. Mitigating means
 - 3.3. On some mitigating means
 - 3.3.1. Litotes as morphosyntactic means
 - 3.3.2. *Un poco*, ‘a little’
 - 3.3.3. Particle *como*
 4. General Spanish of Spain and American Spanish
 - 4.1. Montes (1980-81)
 - 4.2. Briz (1995)
 - 4.3. Puga (1997)
 - 4.4. Briz (2007)
 - 4.5. Old usages of Spain and actual usages of Spanish America
 5. A new hypothesis
 - 5.1. Miyoshi (1999): *acá–allá*
 - 5.2. Miyoshi, *et al.* (2011)
 - 5.2.1. Appearances in modern Spanish
 - 5.2.2. At the end of the Middle Ages and at the beginning of the early Modern Age
 - 5.3. Some points clarified by these two articles
 6. Conclusion
 - 6.1. Litotes and mitigation
 - 6.2. Definition of mitigation
 - 6.3. Spanish mitigation
 - 6.4. Functions and means of Spanish mitigation
- Appendix 1: Studies on Spanish politeness and mitigation
 Appendix 2: HAIRYO-HYOUGEN (“tact”?) and mitigation in Japanese pragmatics
 Notes
 Bibliography
- Keywords:** Spanish language, litotes, pragmatics, politeness, mitigation